

山梨県農政部試験研究機関（水産技術センター）課題評価会議

1 評価委員

岩田智也	学識経験者・研究	山梨大学生命環境学部環境科学科 教授
三浦 久	流通・生産	山梨県漁業協同組合連合会 副会長
古菅一芳	流通・生産	山梨県養殖漁業協同組合 組合長

2 課題評価委員会

(1) 第1回 令和5年9月6日（水） 水産技術センター本所会議室

事前評価課題「アユの生息に及ぼす環境要因と放流適期の解明」 研究員 芦澤晃彦

研究の必要性	4.7
研究内容の新規性	4.0
研究目標、研究計画の妥当性	3.3
研究予算、研究体制の妥当性	3.7
総合評点	3.9

評価所見

内水面漁業の活性化と地域振興のためには、重要魚種であるアユの不漁と河川環境の因果関係や最適な放流方法を明らかにすることが不可欠である。特に富士川水系のアユ資源の動向については県内外の関心も非常に高く、本研究結果の高い波及効果が期待される。

研究方法には環境 DNA の活用や河川環境に応じたマニュアル作成など、これまでにない手法が計画されている。

研究目標、計画ともに適切に設定されている。アユや河川環境に関する過去のデータを解析に活用したり、藻類群衆組成、土砂の流動状況、海洋環境の変動、他の国内河川との比較などを考慮した分析も検討して頂きたい。

過去の研究実績は十分であり、研究員の専門性、技術面においても妥当であると評価できる。富士川水系では河川環境が大きく変動しているなか、様々な自然要因、人的要因がアユ資源の動態に複合的に関与していることが予想される。このため、多角的な視点から学術的にアユ資源低迷の原因究明に努めて頂きたい。

(2) 第2回 令和6年2月8日（木） 水産技術センター本所会議室

事後評価課題「富士の介等の機能性面からの魅力向上」（令和4～5年度） 主任研究員 加地奈々

研究目標の達成度 4.0

評価所見

ビタミンDやシイタケ粉末等の飼料添加により期待された、筋肉中ビタミンD含有量の増加は認められなかったが、増強剤を添加しない状態で富士の介は他魚種に比べビタミンDの含有量が高いこと、さらに皮や内臓といった未利用部位に多く含まれていることが明らかとなり、富士の介の新たな有効活用や機能強化のための基礎情報が得られている。研究成果をもとに、商品開発に向けた取り組みが進められていることも有効な成果と評価できる。

食味に加え栄養面からも優れた魚であることが明らかとなり、山梨県産養殖魚のブランド力向上に

資する成果が得られている。一方、富士の介の情報は未だ広く知られていないため、本研究の成果をさらにPRして頂きたい。

事後評価課題「アユの小型早期放流の実証試験」（令和4～5年度） 研究員 芦澤晃彦

研究目標の達成度 3.7

評価所見

冷水病フリーの小型種苗を適切な場所へ早期放流することで、解禁時の釣果を改善し、放流コストも軽減できることが明らかとなった。また、これまで未利用であった本栖湖のコアユとの交配により新たな種苗開発を行い、複数の種苗を補完的に活用することで、釣果の安定的な維持が可能となることは、今後のアユ漁業の復活に向けて大いに期待できる成果といえる。

河川環境の悪化など、アユを取り巻く環境が大きく変動しているなかで、冷水病フリー種苗の小型早期放流による効果を実証されたことは、アユ漁業及び地域の振興に資する成果として評価できる。

事後評価課題「魚食性鳥類対策の効率化」（令和2～5年度） 主任研究員 三浦正之

研究目標の達成度 4.0

評価所見

養殖場におけるサギ類の侵入に対し、黒色防鳥糸とタイムラプスカメラを用いた侵入抑制の有効性が示された。また、カワウの繁殖抑制についてコロニー一元管理の崩壊を招く営巣分散への対策として、不適当地営巣の集中撤去が有効であることが示されたことは、追い払いと誘導による適切なコロニー管理方法の確立のための成果として評価できる。

事後評価課題「コクチバスの効率的駆除技術の開発」（平成29～令和3年度） 研究員 谷沢弘将

研究目標の達成度 5.0

評価所見

在来生物や生態系に影響を及ぼす外来魚の駆除方法の効率化が急務となっているなかで、先進的な稚魚捕獲方法を新たに開発し、作業の省力性や安全性、捕獲の有効性を実証した画期的な研究である。

他魚種や希少種への影響に留意しつつ、外来魚による漁業被害根絶に向けて本成果を活用しながら、県内での駆除を一層進めていただきたい。